

宮澤賢治センター代表退任のご挨拶

岩手大学・スズキラボ

鈴木幸一

2013年10月24日

本年7月19日に開催されました総会でセンター代表を退任し、引き続き岩手大学人文社会学部教授の山本昭彦先生（表象文化論）が新代表として就任されてから、すでに3ヶ月を経てしまいご挨拶が遅くなりましたことを心よりお詫び申し上げます。

昨年の総会で代表を仰せつかり1年経過しましたが、これまでの代表（望月善次岩手大学名誉教授、岡田幸助岩手大学名誉教授）に比較して、何の実績も会員の皆様に還元できずに大変心苦しいまま任を終えることをご報告させていただきます。

大きな出来事が1～3月に発生しました。本センターを実質的に支えてきた佐藤竜一事務局長（現センター理事）が、大学の就労規則上やむなく退職されました。大学当局に学内外からの多くの雇用継続の嘆願書を提出・説明してきましたが、万策尽きた結果となりました。

そのため、会員の皆様にこれまで提供してきました「宮澤賢治センター通信」が17号（3月20日発行）で停止状態のままであり、毎月開催していました定例研究会が隔月となり、さらに賢治と音楽の会ならびに短歌会までにその皺寄せが及んでしまいました。これも偏に代表として力量不足によるものと重ねてお詫び申し上げます。

しかし、今回の佐藤氏の退職を糸口として、本センターの脆弱部分が露呈されたこととなります。それは、1) 岩手大学の学則にはない任意の組織であり、宮澤賢治センター（岩手大学内）規約があるのみで、関心のある会員たちの単なる集まりというレベルのものです。2) センターの財源は学長裁量経費から配分されるもので、その責任の組織・所在もない状態で、財源もまったく保障されておりません（因みに昨年度までは100万円でしたが、今年は50万円に削減されています）。

では、このようなセンターの浮草的な在り方を脱却できないのでしょうか。そして、会員の皆様に明るい展望を提案できるのでしょうか。これまで理事の方々（特に、現役の教員方）と相談して、3) 岩手大学であるからこそ、賢治センターからの新しい媒体により、学内構成員の方々の理解と支援を得つつ、会員の皆様のみならず全国に発信する方法を実現しようということになりました。4) その時期と具体的な内容は、新代表の山本先生から提案されると思いますので、楽しみにお待ちしております。

さて、小生の専門分野は昆虫の機能利用学というフィールドですが、センターの今回の出来事はカタストロフィー現象であり、昆虫学的に表現すれば、幼虫から蛹への脱皮変態、蛹から成虫への脱皮変態のような劇的な変化を指します。しかし、彼らはその激変を経て、生命体として次世代に遺伝子を伝える営みに突入します。カタストロフィーがあるからこそ、新たな大発展が期待されます。

センターの会員の皆様も昆虫の脱皮変態を観察するように、センターを見守りご支援をいただくことをお願い申し上げます。

賢治さんの知られている最も若い時の作品は、何しろ『よーさん（養蚕）』でして、生命のカタストロフィー現象をしっかりと観察しておりますので、最後に賢治さんに甘んじて退任のご挨拶とさせていただきます。